

国会議員、衆議院の政治倫理綱領によりますと、その前文と最初の項目には

政治倫理の確立は、議会政治の根幹である。われわれは、主権者たる国民から国政に関する権能を信託された代表であることを自覚し、政治家の良心と責任感をもつて政治活動を行い、いやくも国民の信頼にもとめることがないよう努めなければならない。ここに、国会の権威と名誉を守り、議会制民主主義の健全な発展に資するため、政治倫理綱領を定めるものである。

一、われわれは、国民の信頼に値するより高い倫理的義務に徹し、政治不信を招く公私混淆を断ち、清廉を持ち、かりそめにも国民の非難を受けないよう政治腐敗の根絶と政治倫理の向上に努めなければならない。

このような倫理的な精神性は、現代の民主政治だけに限ったものではなく、旧約聖書、もちろん新約聖書などにみられるように紀元前、紀元後のイスラエルにもみられるものなのです。例えば、クリスマスの時によく読まれるイザヤ書に、

ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれました。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威が彼の肩にある。その名は、「驚くべき指導者、力ある神／永遠の父、平和の君」と唱えられる。6 ダビ

デの王座とその王国に権威は増し／平和は絶えることがない。王国は正義と恵みの業によって／今もそしてどこしえに、立てられ支えられる。万軍の主の熱意がこれを成し遂げる。(イザヤ9・5〜6)

ここで「王国は正義と恵みによって」といわれています。このように崇高な倫理を掲げた古代イスラエル王国でしたが、現実はどうだったのかといえば、イザヤよりもほんの少し前にアモスという預言者の言葉を著わすアモスという預言者は、このように語っています。

彼らが正しい者を金で  
貧しい者を靴一足の値で売ったからだ。  
彼らは弱い者の頭を地の塵に踏みつけ  
悩む者の道を曲げている。(2章6節以下)

この時代、表向きはイスラエルは、平和な時代であったようですが、国の内情はといえばすでに崩壊がはじまっていた。

栄枯盛衰の歴史は繰り返します、主イエスの時代もアモスやイザヤの時代と共通しているようです。主の十字架の後、約40年後にイスラエルは神殿もろともローマ帝国によって破壊されてしまうのです。その首都エルサレムの神殿こそは国家の中枢機関だったわけです。その神殿で国全体を取り仕切っているひとたちが、福音書でいうところの「長老、祭司長、律法学者<ファリサイ派」だったのです。

イスラエル歴代の預言者たちがそうだったように、洗

礼者ヨハネ、そしてイエスも最高権力にあらがうのです。彼らが群衆の噂「<sup>26</sup>これは、彼らが殺そうとねらっている者ではないか。26 あんなに公然と話しているのに、何も言われない。議員たちは、この人がメシアだということ、本当に認めたのではなからうか」というのを聞きつけて、逮捕に乗り出した

この情報を聞きつけたイエスは、ご自分の生涯の終わりが近いのだと知り、「今しばらく、わたしはあなたたちと共にいる。それから、自分をお遣わしになった方のもとへ帰る」と言われるのです。ご自分の死をもって「わたしを遣わした方へ帰る」と言われるのです。

32ファリサイ派の人々は、群衆がイエスについてこのようにささやいているのを耳にした。祭司長たちとファリサイ派の人々は、イエスを捕らえるために下役たちを遣わした。33そこで、イエスは言われた。「今しばらく、わたしはあなたたちと共にいる。それから、自分をお遣わしになった方のもとへ帰る。34 あなたたちは、わたしを捜しても、見つけることができない。わたしのいる所に、あなたたちは来るべきではない。」

しかしファリサイ派の人たちは、イエスの言葉を理解しないのです。イエスは信仰において言葉を語られ「わたしを遣わした方へ帰る」という言葉を強く語られたと思いますが、彼らが聞き留めた言葉は、「あなたたちは、わたしを捜しても、見つけることができない。わたしのいる所に、あなたたちは来るべきではない(34節)」だったのです。彼らは肉体の命と地上のことにはしか関心がないせいか、イエスが地中海沿岸地域に離散したユダヤ

人たちのところに逃亡を企てている(35節)と誤解するのです。

35すると、ユダヤ人たちが互いに言った。「わたしたちが見つけることはないとは、いったい、どこへ行くつもりだろう。ギリシア人の間に離散しているユダヤ人のところへ行つて、ギリシア人に教えるともいふのか。36『あなたたちは、わたしを捜しても、見つけることができない。わたしのいる所に、あなたたちは来ることができない』と彼は言ったが、その言葉はどついつい意味なのか。」

この出来事はユダヤの仮庵祭の間に起こったことだったようです。仮庵の祭は、イスラエルが奴隷から解放されてエジプトから脱出し、カナンの地、現在のパレスチナ地方にまで続けた旅の間、仮の庵、現代の言い方ではテント生活をしのぶ祭です。この荒野の放浪の旅において、飲み水がなく渴いたイスラエルの民に対して神が岩から水をわき出す話があります。(出17章)そして仮庵の祭りの最後の日には、イザヤ書12章を歌いながらシロアムの池から水を運び神殿の祭壇に注ぐ歓喜の中で行われる儀式が行われます。

3 あなたたちは喜びのうちに／救いの泉から水を汲む。4 その日には、あなたたちは言うであらう。「主に感謝し、御名を呼べ。諸国の民に御業を示し／高い御名を告げ知らせよ。(イザヤ書12)

仕事などで中近東に滞在した方、あるいは旅行した経験があれば、水が命の源泉であり、いかに尊いものか感

覚的に経験なされたでしょう。日本では水はただですが、お金を出しても買求めるものです。わたしも船員時代に海水を真水に変える造水プラントを船に乗せて運んだ経験がありますが、あの乾ききった砂漠の街に、パレスチナなど中近東一帯において、水は豊かさの象徴なのです。

わたしたちにとっての水についての問題は、その水をどこで、だれから飲むのかということでしょう。もちろんその水とは単に身体だけを潤すものにとどまらず、わたしという命ある存在を根底から支えるものとしての水を意味します。

以前お話しした高森草庵での経験談ですが、別の角度からお分かります。およそ30年前に諏訪にある高森草庵を訪ねたとき、ちょうど田んぼの稲の植え付けの前でした。わずかに二泊の滞在だったと思いますが、わたしは田んぼの畦塗りを終えて、翌日は日曜日でしたから、お御堂での礼拝に参加したのです。そのとき「お水の歌」を神父さんやシスターたちが歌ったことをかすかな記憶がよみがえってきました。

お水をいただきに参ろうよ参ろうよ

泉の水は天のお水よ

お水頂に参ろうよ

お水くださる天のお命よ…

田んぼの労働の翌日でしたから、なおさら、歌が体を通して、しみいるようでした。今幸いにも

YouTube(ユーチューブ)の歌を聞くことができます。歌を聴きながら、あれから30年近くの年月を回想してしまいました。特に辛く苦しかった時を思い出ししてしまうのですが、すがるような信仰は当初無力に思われました。しかしそれは無力ではなかった、むしろ自らの傲慢を捨て去るようにイエスは無力な姿でしか救いを示されなかったことを今銘記するのです。

この仮庵の祭りの最後の日に、イエスは「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。38わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる」と叫ばれたのです。この言葉はイザヤ書12章にもどついていると思われませんが、他に(44章、55章、58章)に関連する箇所があります。それを総括すると、この言葉の意味は、①神との関わり(回復)、②自分自らの救いとよりどころが神であるということ、③そして困窮する隣人との関わりを神の意志にかなったものとするという意味を読み取ることが出来ます。

37祭りが最も盛大に祝われる終わりの日に、イエスは立ち上がって大声で言われた。「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。38わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。」39イエスは、御自分を信じる人々が受けようとしている「霊」について言われたのである。イエスは「まだ栄光を受けておられなかったので、霊」がまだ降っていなかったからである。